中國出土資料學會
平成２８年度第１回大会

日　　時：平成２８年７月２日（土）
平成２８年度第１回大会
受付開始　１２：３０～
研究報告　１３：００～１７：００
総会　　１７：００～１８：００

場　　所：　東京大学　法文１号館１１３教室　（東京都文京区本郷７－３－１）
会場へのアクセス：■地下鉄丸ノ内線・大江戸線・・・・本郷三丁目駅下車徒歩８分
■地下鉄南北線・・・・東大前駅徒歩３分
■地下鉄千代田線・・・根津駅徒歩１０分

報告Ⅰ　陳　逸文（東京大学東洋文化研究所訪問研究員）
発表題目：何組卜辭字體研究——兼論甲骨文字分類的幾個問題
発表概要：　甲骨卜辭字體分類之研究起源甚早，是歷來甲骨學研究的重大課題，近幾年仍有重要成果發表。透過甲骨字體之分類，能對甲骨文字材料進行更深入之分析，是以現今使用甲骨資料時，往往附上字體類別，以供學界研究使用。本人曾整理過中央研究院歷史語言研究所收藏之甲骨，透過何組卜辭中常見之習刻刻辭，重新對何組卜辭字體進行分類，並指出何組各類字體遞變之情況。現今透過更多甲骨資料之比對，對何組卜辭有更進一步之想法，並據此補充先前之成果。此外，透過本人整理甲骨實物及分類字體的經驗，探討現今所見甲骨文字分類的幾個問題。

報告Ⅱ　鄧　佩玲（香港大学中文学院助理教授）
発表題目：從楚地卜筮祭禱簡談先秦時期之「不辜」
発表概要：　在戰國卜筮祭禱簡中，「由攻解於某某」的句式甚為常見，大致應該是指巫祝之人進行祓禳之祭，但過去亦有學者提出該語可能與卜筮中的「蔽志」相關。從近年出土的楚簡可知，「攻解」的對象多樣，包括「人 」、「盟咀」、「兵死」、「溺人」等，當中「不辜」在包山楚簡中出現共兩次，學者大致解釋為無罪而死的冤鬼。「不辜」亦嘗見於睡虎地秦簡，稱為「不辜鬼」。在《左傳》中，「不辜」而死之人化為厲鬼復仇的故事多見，「不辜」應該是先秦時期普遍流行的鬼神觀念。本文的討論，將會從《尚書·洪範》「六極」中的「凶短折」開始，並參考兩周金文中「霝終」的記載，分析「不辜」與先秦死亡觀間的關係。然後，本文將結合《尚書》、《詩經》、《左傳》、《墨子》、《逸周書》等古籍的相關記述，探討「天」、「鬼」與「不辜」間的互動與演化，最後再就卜筮簡中「攻解於不辜」一語出現的背景，以及其所反映的信仰思想作出分析。

報告Ⅲ　鶴間　和幸（学習院大学文学部教授）
発表題目：張家山漢簡および岳麓秦簡の奏讞書に見る秦の歴史
発表概要：　2007 年湖南大学岳麓書院が香港で購入した 2176 枚の秦代の竹簡には、官吏の手引き、夢占い、算数書、律令などのほかに、奏讞書という上級官庁への再審の

書が残簡を含めて 16 件見られた。奏讞書はすでに 1983 年に出土した張家山漢簡のなかに見られ、22 件の裁判事例のなかに 4 件の秦代の事例が含まれていた。盗牛（始皇元年）、密通（始皇元年）、強盗傷害（始皇 6 年）、戦場逃亡（始皇 27 年）がそれである。岳麓秦簡の奏讞書も始皇元年（事例 11）、15 年（12）、18 年（07）、20 年（10）、21 年（06）、22 年（04、05、14）、23 年（03）、25 年（01、02）、26 年（15）、28 年（08）と始皇帝の統一（始皇 26 年・前 221 年）の前後にわたっている。殺人、詐欺、窃盗、戦地離脱、逃亡、文書偽造、姦通などの事件の処理は法制史の貴重な史料であるが、ここでは統一前後の地方社会の実態を物語る貴重な社会史史料として整理する。『史記』と出土資料との接点をさぐることが重要な作業となる。

☆参加費(資料代）500円
☆非会員の来聴を歓迎します
☆大会終了の後、懇親会を行う予定です。ふるってご参加ください。

連絡先（例会委員長）
〒270-8555
千葉県松戸市新松戸３－２－１
流通経済大学法学部
富田　美智江
Tel：0297-60-1930（直通）
E-mail：tomita-michie@rku.ac.jp